

水草研究会第4回全国集会開催の思い出

沖 陽子 (岡山大学環境理工学部)

本研究会会報9号を捲ると、「1982年(昭和57年)8月7日、倉敷の白壁に夏の日射しが強い土曜日の午後、本研究会第4回全国集会在開催された」と報告している。参加者は54名で、研究会発足以来、初めて50名を越す集会となった。

思い起こすと私が水草研究会と出会ったのは、新聞の案内板で第2回全国集会在大阪市立自然史博物館で開催されると知って、気ままに参加したのがきっかけである。当時、倉敷市にある岡山大学農業生物研究所(現資源生物科学研究所)の助手に赴任したばかりで、学生時代から手がけていたホテイアオイの研究に没頭していた頃である。そして、名古屋で開催された第3回全国集会に参加した時に、当時会長を務めておられた大滝先生や角野さんから次回は岡山で受け持ってもらえないだろうかとお依頼を受けたのである。倉敷に移ってまだ日が浅く、また水草研究会に入会して日も浅く、全国集会開催をお引き受けするなど思いも寄らなかったのであるが、「若さ」とは怖いものでお引き受けすることになってしまった。

さて、ちょうどその頃、時を同じくして、京都大学の恩師植木邦和先生を会長にホテイアオイ研究会が発足し、昭和57年7月3日に第1回の全国集会を開催している。そちらの事務局を担当していたので、今から考えると両研究会の全国集会を1ヶ月違いで開催していたことになる。やはり「若さ」とは怖いものである。

しかしながら、私にとっては水草研究会の開催の方が、より印象深く思い出に残っている。なぜなら、この集会を開催するに当たって多くの諸先生や諸先輩との出会いがあり、ご支援頂いたことが忘れられないからである。まず、岡山県植物研究会会長で、かつ、お多美鶴酒造の社長でおられた西原禮之助先生。大滝先生が「岡山には西原先

生がおられるので、お声をかけてみては」と勧められて、厚かましくご連絡を取らせていただいた。気さくで良さ理解者、しかも人格者。若輩者を影となって支えて下さった。今も思い出しては深く感謝している。その後、同植物研究会の幹部でおられた加藤先生、花田先生、楠原先生と共にお亡くなりになるまで種々ご指導を賜った。また、岡山県農業試験場も全面的にご支援頂き、富久現場長や岡武元支場長らが話題提供の座長を務めて下さった。

会場は倉敷の美観地区の中央に位置する倉敷文化センターであったが、今ではめずらしくなった和室を使用し、予想外に多い参加者で室内狭く、膝を寄せ合って文字通り熱気の籠もった質疑応答が繰り広げられた。さらに、話題提供者は野口達也先生、生嶋功先生、植木邦和先生、別府敏夫先生、笠原安夫先生と、今考えるとすばらしい豪華キャスターの顔ぶれであった。会報9号には会場前で記念撮影をした写真を掲載している。余談ながら右端に写っている立て看板は私の自筆である。前列に並んでおられる原田市太郎先生、西原先生、花田先生、加藤先生、植木先生、斉藤吉永先生は残念ながら既に他界されている。かけがえのない先達者が去られた寂しさと時の流れを感じざるを得ない。そして、ご冥福を祈るばかりである。

今では、恒例となっているエキスカッションはこの第4回から始まった。岡山県南部に自生する水草を求めて、マイクロバスに乗り込んだのは29名であった。ここで、お世話になったのがフィールドに強い小畠裕子氏と武田満子氏である。エキスカッションの候補地探しに同伴して頂き、また現地の説明などもお願いした。バスは午前9時30分に倉敷駅を出発し、日応寺、百間川、阿部池、金甲山付近の溜池を巡って午後5時前に岡山駅で

解散した。解散後に県下、雷雨警報が発令され、危機一髪で皆さんにお帰り頂いて安堵したことを想い出す。20年経た現在、最も様相が変わったのは百間川であろう。その当時は、河川を生息地とするクログワイ群落やオモダカ群落が見事であった。また、オニバス大群落の景勝地であった。さらにコキクモ、イヌタヌキモ、サンショウモ、デンジソウ、ウキアゼナ、ミズアオイなどが顔を揃えていた。昭和63年頃まではコキクモ群落やデンジソウ群落もかなり確認されていたが、平成8年以降、河川水辺の国勢調査ではクログワイ、オニバス、コキクモ、サンショウモはかろうじて分布が確認されている程度で、ホテイアオイ、ボタンウキクサ、コカナダモを始め富栄養化の指標となる草種の分布が圧倒的に多い。流量が少ない放水

路であるため、河床への底泥堆積が激しく、国土交通省も浚渫を実施し、人為的洪水など種々検討しているが、頭を抱えているのが実態である。

昔を回顧する文章を書き始めると、かなり老化が始まっている証拠であり、また、若い方々にとっては、知らない方の名前を連ねても何ら面白くないと想像される。しかし、少なくとも世話役を仰せつかったこの第4回全国集会是、多くの方々のご支援が凝縮された賜物と、今も感謝している。そして、あの頃の先達者達の本研究会に対する熱い思いが脳裏によみがえる。時代は移っても、この思いを若い世代に継承させるのが私の世代、つまり中堅どころの役目と心得ている。本研究会のさらなる発展を祈念して筆をおきたい。

